
想像が創造を具現化させる

アマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想像が創造を具現化させる

【Nコード】

N6951Y

【作者名】

アマ

【あらすじ】

ある日ファンタジーが現実となった世の中。創造と言う名の魔法のような技術。だがそれは魔法ではなく、人間の持つて生まれた能力。中学の時からバカにされて、友達の少なかった終夜が高校で新たな物語を創りだす。

第一話 憂鬱な実技試験（前書き）

「“そうぞう”を超えた先には」のリメイクです。前作のはネタバレ防止のため削除致しました。前作のとは内容がまるっきり違いますので、完全に忘れてください。

第一話 憂鬱な実技試験

人間はつまらない………

とある人間がふと思つたことだつた。

なぜ人間は空を飛べない？なぜ人間は魔法を使えない？

これらは人間、誰もが一度は求めるものではないだろうか。

求めてはいてもとても叶うことではない、そう誰もが思っていたはずだ。

だが、そんな人間にも何か特出しているものがあるのではないか、とそんなことを考え出した。

そして、一つの答えに辿り着く。

それは「想像力」。

漫画、アニメ、ゲーム、小説、ドラマ………

どれも人間が無から考え出したものだ。

もともと魔法という概念は誰が考えた？人が空を飛ぶという想像を誰がした？

どれも人間の想像から生まれたものだ。

天狗や河童等の空想上の生き物は多々あるが、その中で明らかにされている存在、『仙人』。

遙か昔、仙人は無から物を生み出す力を有していたと言われている。これは頭に浮かべた物を具現化させたのではないだろうか。

この仕組みさえ分かれば仙人の子孫と言われているすべての人間にも扱うことができるのではないだろうかと考えた。

そしてある日、それは現実となった。

無から有を作り出す能力。

いくつか制約はあつたが、『想像』を『創造』することを可能にした。

だが、これは決して超能力や魔法ではない。

人間が持つて生まれた能力だ。

人間はつまらないものではなかった。

素晴らしい能力を持っていたのだ。

ただ今までその使い方を知らなかっただけ。

この日から、新たな物語の幕開けとなる。

これはファンタジーが現実となった『想像』を『創造』する物語・
・・・

「はあゝ憂鬱だ」

この少年の名前は不動終夜。^{ふどうしゅうや}

ワックスで髪を整えた、どちらかというと幼い顔立ちをしている。

目つきも温厚な目をしていて、人当たりがよさそうだ。

「いい加減覚悟を決めろよ」

「湊はまだいいよ。ちゃんとできるんだから。それに別に覚悟を決めてないわけじゃない」

湊と呼ばれるウェーブのかかった茶色のボブヘアの男がやれやれと肩をすくめる。

「まあ確かに終夜ほど『創造』の『具現化』ができないのも珍しいけどさ」

創造・・・・想像によって無から造りだすことの過程を指す。
中にはすでに在るものを別の形につくり変えていく行為という意味でも用いられる。「創造」によってものを生み出すことを「具現化」という。現代の人間のほぼ全員にこの創造という能力が備わってい

るため、創造ができないということは昔で言う、勉強ができないということと同義となる。要するに社会的にも虐げられてしまう。高校ともなると創造ができなければ入学することは難しいのだが、終夜は筆記テストだけで名門とも言われる鷹左右学園たかそうに入ることができた。

創造が重要である現代の世の中で、筆記だけで受かるとなればほぼ満点でなければならない。終夜はそれでもまったく創造ができない自分が、この名門とも呼ばれる鷹左右学園に入れたことに疑問を覚えながらも当時は喜んだ。

「だけど名門だからこそ当然実技が重要視されるのは分かっていたはずなのに・・・」

要するに朝也はこの学園の落ちこぼれだった。運よく受かっただけで、本来この学園にふさわしくない人間だと。

それが理由で入学したとはいえ、朝也にはこの学園で友人と呼べる存在がここにいる月城湊つきしろみなとしかいなかった。

「お前が具現化できないなんて皆知ってるんだから、今さら怖気づくことはないんじゃないか」

「他人事だなあ」

「そりゃあ俺はできるからな」

「はぁ・・・」

終夜が再びため息をついたところに放送が流れた。

“これから学年ごとに合同の実技試験を行います。Aクラス以外の

一年生は校庭に集まるように”

昨日が入学式だった、入学したての一年生には生徒の実力を測るために実技試験が行われる。

ちなみにAクラスだけ校庭に集まらないのは、彼らが「魔法使い《ウィザード》」と呼ばれているからだ。

魔法使いのようになんでも出せるほど創造に長けている生徒に、「魔法使い《ウィザード》」という称号が与えられる。

この「魔法使い《ウィザード》」を与えられた生徒は一学年に三人しかおらず、Aクラスに集められる。

ウィザード級の生徒はその学園にとって、戦力的にも非常に大きく重要な存在であるため、一般の生徒の前でむやみに創造を見せないようにしている。

といっても、そう思っているのは教師だけであり、別段行動の制限はされていない。

「ほらさっさと行くぞ」

「りょーかい」

生徒たちにとって大勢の前での実技試験というのは、自分の創造自慢の場と言っても間違いではない。

終夜たちが廊下に出ると、生き生きとした表情の生徒が多く見られた。

そんな中で一人憂鬱そうな顔をしていれば、これまた目立つ。

「お、あそこに暗いやつがいるぞ」

「ほんとだ。楽しい楽しい実技の時間なのになんで暗いんだろうな」

「おいおいお前ら、そういうこと言つのはやめとけって」

湊以外で味方してくれる人が、と一瞬喜んだのも束の間、次の言葉でその喜びも一瞬にして地に落とされる。

「何もできないからだろ。残酷なこと言つなよ」

「そりゃそうだ。すまんなあ、残酷なこと言つて」

「あはははは」

「お前らいい加減に・・・」

「いいんだよ湊。さつさといくぞ」

慣れているのもう気にしない。

こんなことはなにも高校に入ってからではないのだ。

中学の時にはすでに孤立していた。

人当たりのよさそうな顔をしているため、時々女の子から声はかけられていたのだが、入学したての終夜はものすごく暗かった。

一年も経てばさすがに普通に戻ったが、時すでに遅し。気づけば自分の周りには湊しかいなかった。

湊とは中学の時から付き合いなのだが、湊だけは朝也と普通に接してくれていた。

「なあ、何回も確認するようで悪いんだけど、本当にお前の媒体はそれで正しいのか？」

媒体とは、創造するときの必須アイテム。現実世界で自分が一番大切にしているものを媒体に選ぶ。現実の中で自分が大切にしている

ものを想像の世界に持ち込むことで創造をより正確にできるようにするためだ。

媒体がなくても創造はできるが、精度が大きく低下し、非効率になる。魔法使い級と呼ばれる人でさえ満足に扱うことはできなくなるほどだ。

だが、自分が一番大切に行っているという性質上、なかなか見つからない人や媒体が変わる人がいる。本当に大切なものなら媒体を変えることは可能だが、そういう人はたいてい創造がうまくならない傾向にある。

「お前のそのペンダント。誰からもらったのか覚えてないんだろ？」

「まあ、ね。だけどこれ以外に特別なものがないからな」

終夜が服の中からペンダントを取り出す。中が開く形式になっているのだが、中には何も入っていない。気づいたときには、終夜はこのペンダントを身に付けていた。

「湊は媒体がそれだって、どうやって分かったんだ？」

湊の媒体は音楽で指揮者が使う銀色の指揮棒だ。

「俺はこれを物心ついたときから持たされてきたからな。俺もこれ以外考え付かなかった」

「特別なものって言うたらそんなもんだよなあ」

特別にもいろいろな意味がある。大切な人からの贈り物、思い出深い物、自分の成果、証明等……

終夜のペンダントはこのどれにも属さない。実際は属しているかも

しれなくても記憶になればそれは属していないのと同義だ。
だから創造ができなくても仕方がない……。終夜はそう思っ
ていた。

「次の生徒」

合同と言っても、クラスごとに分かれてそれぞれ試験が行われる。
それでもすべてオープンな状態なため、試験中の様子が誰でも確認
できるようになっているものだから終夜は困っていた。
創造ができないことをバカにされるのが慣れていると言っても、ほ
ぼ全クラスの生徒の前でやるものだから気が進まない。

「覚悟決めたか？」

「覚悟もなにも逃げられないだろ」

「とりあえずどんなにシヨボくても成功させる。シヨボイだけなら
他にもいるだろ」

湊の言うことには一理あるが、名門とも言われるこの学院内での創
造がシヨボイのレベルはたかが知れている。

「ま、バカにされる内容が『できない』から『シヨボイ』に変わる
ただけだな」

そう言う終夜の口調はふざけているだけ。終夜は創造ができないと
いうことをネガティブに考えているわけではない。これが自分の一
部だと受け入れている。

ただそれでも人前でやるのとはまた別の話になる。

「次！」

「ほら、次は湊の番だぞ」

「んじゃ、行ってくる」

湊が指揮棒片手に前に出る。他の人は一回一呼吸おいて創造を行っていたが、湊はまるで一呼吸おくかのように慣れた感じで創造を行った。

今回の課題は自分の属性の玉を出して飛ばすこと。

属性というのは火、水、風、雷、土の五つの属性のことだ。五大元素と呼ばれる火、水、風、雷、土で、火を使える人は水が使いにくい。風を使える人は雷が使いにくいという決まりがある。これはウイザード級の人間も例外ではない。

他に光と闇という属性があるのだが、使える人が本当にいるのかどうかわからない不確定な属性だと言われている。

「ほいつ」

湊が出したのは直径30cmほどの風玉だった。大きさとしては他の人と比べたらいして大きくない。他の人は派手さにこだわってやたらと大きな玉を出していた。

だが終夜には分かる。湊の風玉は他の人よりかなり密度が濃いことに。あの風玉を学院に放つたら、簡単に貫通することだろう。

湊は出した風玉を真上に放って破裂させた。そのまま、湊は終夜の元に戻る。

「ただいま」

「お疲れさん。にしてももつと派手にできただろうに相変わらずだな」

湊の実力ならあの質量でももつと大きくできる。いくら密度を濃くしたところで試験官が気付かなければ意味がない。

「お前こそその洞察力はたいしたもんだよ。と言っても俺と同じく他者には分からないことだけだな」

「まったくだ」

2人が話している間にも次々と試験は進んでいく。

「次！」

次の生徒は二人同時だった。

「今度は二人同時？どういうことだ」

2人は目を瞑って手を繋ぐ。

少しして直径1mほどの水玉が具現化された。

「あれってどういうことだ？」

「見たところ手には何も持っていない。何かを身に着けているふうでもないし、にわかには信じられないけど、お互いが媒体なんじゃないか？」

「確かにそうかもな。実は目立たないものが媒体って可能性もある

けど、2人で出る理由の説明にはならないからな」

「それより、少し様子がおかしくないか？」

2人が出した水玉が誰もが見て分かるほど不安定になり始めた。

「長髪の子が苦しそうにしているな」

こちら誰も分かるほど明らかに体調に異変が起きていた。

長髪の子の体調に呼応しているかのように、水玉がグニャグニャになっっている。

やがて長髪の子が膝から崩れ落ちた。それに続いて水玉を崩れ落ちる。

「大丈夫か？」

気を失うほどではなかったみたいで、相方の肩を借りてフラフラながらも元の位置に戻っていく。

「人の心配している余裕はお前にはないはずだぞ」

「え？」

「次、お前だろ」

湊の言葉で前を見ると、試験官……以外にもクラスの大半が終夜を睨んでいた。

「……行ってくる」

終夜が前に出ると、終夜のクラスの間が途端に静まった。まるで皆で示し合わせていたかのようなうだつた。よく見ると何人がニヤニヤしている。

「ふう」

終夜はペンダントを強く握りしめる。

創造をするには、まず自分の想像の世界を展開しなければならない。このフィールドのことをIF（Imagination field）と言う。もともとIF、もしもの世界が現実になればいいなということでの名称らしい。

自分を中心に他者には見えないフィールドを展開する。この中は自分の脳と同じで、強く想像したことをこのフィールド内に具現化させる。

そして火の玉等を具現化してフィールド外に出しても消えることはない。フィールド内では具現化はできないが、一度具現化したそれは現実存在する「もの」となるからだ。

終夜はフィールドを展開するが直径2？ほどの小さな火の玉しか出せなかった。しかも出してすぐにポンツと間抜けな音をたてて消滅した。

「あははははっ」

何人かの生徒が一斉に笑い出す。終夜はそれらを無視して湊の元へ戻った。

「ちゃんとできたじゃないか」

「そりゃどうも」

誤解されがちだが、湊は決して終夜をバカにしているわけではない。創造ができるできないで人を区別しないだけだ。

確かに昔は勉強ができないからといって孤立していたわけではない。それなのになぜ自分には友人ができないのか終夜は不思議だった。

「これで試験は終了だ。各自教室に戻るように」

未だに笑いが絶えない中、終夜と湊も教室に向かう。途中でからかってくる生徒が現れたが、もちろん終夜は軽くスルーした。

「そつえばさっきの生徒はどうなっただろうか？」

「さっき普通にみんなと一緒に戻つてるところを見たぞ」

湊の疑問に終夜が答える。

「よく見てるなあ」

2人が教室に入ると、すぐにいつもの生徒が絡んできた。

「お、できそこないが帰ってきたぞ」

「あの間抜けな音はなんだ？やろうと思つてできる音じゃねえな」

「それってある意味すごいってことじゃね」

「それもそうだな。よかったじゃねえか、お前にもすごいことができて」

「（こいつらも飽きないなあ）」

「そういうのやめてください」

喧噪の中、一人の女の子の声が響く。

それは先ほど体調を崩した長髪の女生徒だった。

「そうやってバカにするのってよくないと思います。私だって不安定な創造で体調崩しちゃったですし……バカにするなら私にもしてください」

皆呆氣にとられる。

一見おとなしそうな女の子が、真剣に今日会ったばかりの男子生徒を庇う姿に圧倒されていた。

「いや、俺は別にかまわないから……」

庇ってくれるのは嬉しい。

だけど、どこか気恥ずかしいものがあつた、が……

「よくありませんっ」

一蹴された。

「……………」

「まあ終夜、ここは素直に喜べ」

嬉しいことは嬉しかったのだが、妙な気持ちだった。

「ちっ、なんだよ」

「いい子ぶりやがって」

男たちは悪態をつきながら教室を出ていく。

教室内は再び静寂に満ちた。

「あ、あのっ」

最初に口を開いたのは女生徒だった。

「ご迷惑……でしたか？でも同情とかじゃありませんっ。私も同じですから……」

終夜は最初からこの女生徒が同情で庇ったなどと思ってはいない。ただ、突然すぎて何を口にしたらいいか迷っていただけだった。

「そんなこと思ってないよ。むしろお礼を言いたいぐらいだ」

「よかった……あ、私は小鳥遊希たかなしめぐみです」

「ボクは小鳥遊望たかなしのぞみだよ。ボクたちは見ての通り双子だから」

ずっと相方のそばで様子を見ていた少しボサツとした短髪で活発そうな女生徒も自己紹介をする。特徴と言えは着ている服の袖が少し長いところだろうか。

見ての通り、と言っているけど誰が見ても2人が似ているとは思えなかった。

「あ、ああ。俺は不動終夜。こいつは・・・」

「月城湊だ」

「よろしくね。あ、ボクたちのことは名前で呼んでね。同じ苗字ですから」

さん付けにしようと思ったのだが、呼び捨てでかまわないと言ってくれたため、呼び捨てにすることに。

同年代の女の子を呼び捨てにすることが初めてな終夜は、内心少しドキドキだった。

「実は・・・私たちはお互いが媒体なんです」

言いにくそうに告白する希に終夜はやっぱりとつぶやいた。

「気づいていたんですか？」

終夜としてはあれを見てその可能性を考えないほうがおかしい思っていたのだが、希は気づいたことが意外だったようだ。

「今まで私たちがお互いが媒体だって言っても、誰も信じてくれなかったんです。精神的にお互いがいなきや駄目な性格なんだろうって」

人間が媒体だって話は聞いたことがない。そう思う人が多くても不思議ではなかった。

「でも、皆がそう思う理由は私のせいなんですけど・・・」

先ほどの試験の時、創造をした途端希の体調が悪くなったところを思い出す。

媒体が合わなくて体調が悪くなるという話は聞いたことがないが、失敗する理由が媒体にあるというのは別段おかしくない。

そんなことを考えながらも、暗い雰囲気が苦手な朝也は話題を変えることにした。

「それよりそろそろ帰らない？HRホームルームがないみたいだから、一緒に帰ろう」

終夜にとって女の子と一緒に下校するということが初めてだったから、勇気のいるセリフだった。

「はい」

終夜が気を遣ってくれたことに気づいた希は、笑顔で返事をした。

第一話 憂鬱な実技試験（後書き）

終夜の性格の違い等で若干違和感があるかもしれませんが、これからもうよろしくお願い致します。

第二話 出会い

「ここどこだよ・・・」

終夜は一人、暗い洞窟の中を歩いていた。

上がどこまで続いているのか分からないほど暗く、自分の足元すら見えない状況。

創造で明るく照らすことなんてできるわけもなく、間隔と手探りで進んでいた。

「知らない洞窟で道に迷うとかヤバいな、この状況」

こんなところを彷徨う羽目になったのには、もちろん理由がある。それは終夜の休日の日課、具現化の練習中に起きた出来事だった。

「はあ、はあ」

いつも終夜は自分の限界まで創造をしていた。

やっていることは、火、水、雷、風、土の属性玉を一通り具現化するだけ。

しかし、どれをやっても上手くいかないのはいつものことだ。

それでもあきらめずにするこの訓練も、全くの無駄というわけではない。

もともと終夜は全く具現化ができなかった。

しかし、先日の試験で証明したように、『全くできない』から『少しできる』へと進歩した。

ここに至るまで一年かかったが、練習すれば進歩できるというのが

証明できたからこそ今もこうして続けていられるのだ。

「ラスト」

自分の限界が訪れたと思ったときに、最後の一回と無理やり創造をする。

これはたまたま漫画で見た知識だったのだが、なんとなく上達している気がして毎日続けていた。

ちなみに内容は『己の限界に達した時からが修行の始まり』といった暑苦しい内容だったのだが、中学二年であつた終夜には強く心に響いた。

そのため、これもいつものことだったのだが、事件はこの時起きた。最後に火の玉を出そうと集中し始めたとき、耳がマヒするほどの大きな音が鳴った。

学校でマイクを使用しているときにたまに鳴るあれだ。それがまるで終夜の耳元で鳴っているかのように響いたのだ。

限界ギリギリだった終夜は、この音で集中力を欠いてしまった結果、創造した火の玉を暴発させてしまったのだ。

とつさに火の玉を自分から切り離して後ろに下がったから直撃はしなかったものの、一度具現化した火の玉は消えずに地面に当たって大爆発を起こした。

「うおっ」

地面が薄かったのからか大きな穴をあけてしまい、近くにいた終夜はその穴に落ちてしまった。

「ちよっ、深っ、これマジ死ぬって」

意外なほど深かった穴にどんどん落ちていく。

終夜の頭には着地した時、自分がグロテスクな状態になって地面に突っ伏している光景が浮かんできた。

慌てて壁に手をつけて勢いを殺そうと試みる。

爪が削れ、皮膚を傷つけながらも勢いはほんのわずかしき落ちない。やがて地面が見えてきて、慌てて風玉を創造した。

自分の未熟さと疲れで、かなり小さな風玉だったが、質がよかったのか死なずに着地することができた。

「・・・・・・・・」

無我夢中で創造した結果、今までに類を見ないほど質がいい創造ができて心臓がバクバクだ。

喜びの興奮より死に直面した動悸なのかもしれないが・・・

「こりゃあ上に登るのは勘弁だな」

壁がゴツゴツとしているから頑張れば登れなくもなさそうだけど、しくじれば今度こそグロテスク確定だ。

疲れが限界に達している終夜にはきつい作業になる。

終夜はすぐにその案を切り捨て、道が続いているのを確認して先に進むことにした。

先ほどと違い、地上の光が届かないので足元が見えないほど暗い。

なんとか自分の感覚を頼りに、壁に手をつきながらゆっくりと進む。

「コウモリとか出ないでくれよ」

独り言でもしていないとやってられない状況だった。

別に終夜は暗いのが怖いわけではない。

幽霊が出そうとかで恐れているのではなく、本当にコウモリや蛇なんかが出てくるかもしれないということに恐怖していた。

「光・・・・・・・・」

どれだけ歩いたか分からない。

終夜の体感では一時間は歩いていた気分だった。

やがて目の前に光が差し込み、まず自分の足元と後ろを確認して変なものがついてきていないか確認した。

「よしっ」

そして光の元へ素早く走り出した。

光の正体は太陽・・・ではなく、ネオンの光だった。

そして中央には鎖によって礫にされた女の子が眠っていた。周りには何もない。

女の子の周りに、四つのネオンが光る柱があるだけだった。

幼い顔立ちをした背の低い女の子。

礫の状態とのギャップに終夜が感じたのは当惑や興奮ではなく、疑問だった。

なぜ礫にされているのか、という疑問ももちろんあったが、こんな地下に長い間礫にされていてなぜ衰弱していないのか。

この状況は現実的に考えてありえなかった。

鎖と柱には大量の埃が溜まっている。

一週間とかのレベルではなかった。

終夜は女の子に近づき、呼吸と脈を確認したが、どちらも止まっていた。

しかし放っておけるわけもなく、どうやって鎖を外そうかと朝也は思案する。

試しにどのくらい鎖を動かせるかと鎖に触れてみた・・・・・・・・瞬間に鎖が消滅した。

終夜が触れたところからジワジワと消滅していく。

「おっと」

支えを失った女の子が崩れ落ちるのを終夜が受け止めた。

「つて、裸あ!？」

鎖で隠れていたから露出が多いぐらいにしか思っていなかったが、受け止めた少女は何も身に着けてはいなかった。

慌てて自分が着ていたパーカーを脱いで少女にかける。

すべすべで柔らかい肌。幼い顔立ちをしているが、きちんと女の子の身体をしていた。

「これって死体……なのかなあ」

仮死状態に取れなくもないが、それにしては保存が雑だ。

かといってこんなきれいな体を死体と呼ぶのも不自然な気がした。

「パチッ」

「うおおっ」

死体だと思っていた少女が、目の開く「パチッ」という擬態語を發しだした。

さり気なく脈を確認してみると、きちんと生存していることが確認できた。

終夜はそのままゆっくりと少女を下ろす。

「……いろいろ聞きたいことがあるけど、まずはここから出ないか？」

終夜は冷静だった……わけではない。
鎖が消滅すると同時に、ネオンの光も徐々に消えてしまったので、
再び何が出るか分からない恐怖に陥ったのだ。

「……うん」

答えながら少女は終夜の裾をちょこんと掴む。

「怖いのか？」

「……うん」

「俺も怖い」

お互いを感じている恐怖は違うものの、少し情けなかったかと終夜は後悔する。でも怖いものは怖い。

終夜は少女が寒そうにしている様子を見て、先へ進むことを急いだ。
決して怖かったからではない。

暗い道を歩いている間、気を紛らわせるために少女に話しかけたが、
少女が口を開く気配はない。

怖くてそれどころではないのだろうと終夜は思っ、会話を諦める。
道がだんだん上を向き、終夜が落ちた分を登っている感じがしていた。

そして道が険しくなるにつれて少女の歩くペースが悪くなっていく。

「ほら」

終夜は腰を下ろして背中を開けた。

「・・・・・・・・・・？」

「足つらいだろ？おぶってやるから遠慮せずに乗りな」

少女は一瞬考える素振りを見せたが、やがて無言で終夜の背中に体を預けた。

「（軽つ）」

人間の体はこんなにも軽いのかと疑うほどにその少女は軽かった。

「（そして柔らかかつ）」

少女は衣服をまったく身に着けていない。終夜の上着を肩からかけているだけだ。

少女の肌と朝也の手がダイレクトに触れ、僅かながらの胸もほぼダイレクトに背中に伝わっている。

先ほども少し触ったがあの時とは違い、人間の体温を強く感じる。

「・・・・・・・・・・？」

「なんでもないですよ？」

疑問に疑問で返してさらに疑問に思う少女を無視して終夜は歩を早めた。

少女は恐怖で終夜にしっかりと抱きついていていため、終夜のドキドキは止まらない。

「（これが吊り橋効果ってやつか）」

。 終夜はテンパってわけの分らない、間違ったことを考えてしまう。
単に女の子に対しての免疫が極端にないだけだ。

「・・・光」

少女のつぶやきに終夜は正氣に戻って、光に向かって一目散に走りだした。

今は暗いところから抜け出したいという気持ちを忘れて、少女を早く下ろしたいという気持ちでいっぱいだった。

「・・・眩しい」

今度は太陽の光だった。

女の子は眩しさで終夜の背中に顔を押し付ける。

この子にとって太陽の光は何年ぶりだったのだろうと考えたところで、気づいた。

「（この子どうしよう・・・）」

洞窟を抜けだしたからといってこのままにしておくわけにはいかない。
い。

長い間洞窟の中に縛られたぐらいだから家や家族なんかがあるわけがない。

だからといって事情を説明して保護してもらうことも難しいだろう。

「一緒に来るか？」

結局この答えに辿り着いた。

見ず知らずの女の子を家に連れ込む。

普通はありえないが、いろいろとパニックになっていた終夜にはこれ以外考え付かなかった。

「（コクリ）」

背中であなずく気配を感じて、そのままの状態で家に送ることにした。

自分の背中で少しでも女の子の裸体を隠すためだ。

「（でもこれって端から見たら犯罪に見えるような気がする）」

家に着くころには冷静になっていた終夜が、女の子を家に入れるときにやっと気づいたことだった。

「とりあえず俺のＴシャツとジーパン・・・・・・・・・・はベルトをつけても落ちるからそれで我慢してくれ」

少女はコクリとうなずく。

こうしてよく見てみると幼いながらも、すごく整った顔立ちをしていた。

幼さが強調されてかわいらしいという形容詞がよく似合う。

先ほどの柔らかい肌を思い出した終夜は、慌ててそれを振り払って本題に進む。

「俺は不動終夜。君は？」

完全に冷静に戻った終夜はまず服を与えて自己紹介を始めた。
終夜は過去に振り返ることはしない。

どんな結果であれ、それを受け止めて次に最善の方法を考えることにしていた。

「・・・綾音は綾音^{あやね}」

ちよこんと座っている綾音と名乗る女の子がおどおどしながらも自己紹介をした。

「んじゃ綾音。綾音はなんであそこ^{そこ}にいたのか分かるか？」

「（フルフル）」

首を横に振る綾音。

「創造って知ってるか？何でもいいから創造してみて」

記憶消失の時は創造ができるかどうかをまず確認する。

創造ができれば生活にはまず困らない。

だが創造ができないほどとなると、かなりの重症ということになる。

「ん」

目を瞑って一生懸命に唸りだす。

「それ、たぶん想像」

「ん？」

「はあ」

お約束のボケに軽くため息をつく。

今の時世、創造ができないどころか知らないなんてのはかなりキツイ。

しかし、それ以上に終夜は疑問だった。

「綾音はいつたいつからあそこにいたんだ？」

創造が一般に広まったのは約100年前。それ以前の人間に創造は使えない。

実際にまだ100を超える人間が少数ながらも存在しているため、創造が使えない人間というのがしっかりと確認されている。

あの保存の仕方で仮死状態だったとは考えられないし、綾音が100を過ぎているとは考えにくい。

記憶消失なら創造ができなくても不思議ではないが、見つけたときの状況から考えて、単なる記憶喪失で片付けられる問題ではないと終夜は考えた。

「（固定・・・か）」

土属性の固定を使えば、生きたまま、そのままにしておくことが可能だ。

もつとも、理論的には可能だが、いろいろな問題により現実にそんなことはありえない。

「あ・・・」

突然綾音が何かを思い出したように声を出す。

「何？」

「綾音はロボットなの」

「・・・・・・・・」

他の可能性と比べたらロボットというのが一番有力な気がする。

「まあロボットでいいや。じゃあご飯とかいらない？」

「ご飯は・・・・・・・・ほしい」

グウーっとお腹の鳴る音が響く。

「とりあえず昼にしようか」

ツッコみはしない。

何も知らない綾音にこれ以上聞くことを諦めただけだった。

「うん」

綾音はパアツと明るい顔になってうなづく。

「じゃあちよつと待っててくれ」

両親共に常に外出しているので終夜は一人暮らしをしている。
なので料理はお手の物だ。

「早く食べたいだろうから簡単に野菜炒めでいいな」

「あ・・・・・・・・」

綾音が何か言いたそうにするが、火の音で終夜の耳には届かない。

「ふんふんふん」

ノリノリで料理をする終夜の傍らで落ち込んでいる綾音。
その意味を終夜は食事中に知ることになった。

「・・・人参とピーマン・・・嫌い」

「・・・ロボット・・・だよね？」

「・・・人参とピーマン・・・嫌い」

そろそろ自分の人参とピーマンを終夜のお皿につつす。

「好き嫌いはいけません」

「あつ」

「ほら、キャベツと一緒に食べれば味なんて気にならないから」

「あむ・・・・・・うっ」

「よく食べたな」

よしよしと頭を撫でると綾音は嬉しそうにしてみう一口パクツと食べた。

「うっ」

「はは」

苦い顔をしながら頑張って食べるたびに終夜は綾音の頭を撫でる。
その姿はまるで、妹に対する優しい兄のようだった。

「く」

食事を終えて終夜が食器を洗っている間に、綾音は静かな寝息を立てて寝てしまった。

「さて、綾音はもう家に置いとくしか選択肢はないな。肝心の服の・
・特に下着の調達なんだが・・・・・」

終夜の隣で寝ている綾音をちらっと見る。

綾音よりはるかに大きなＴシャツを着ているためギリギリ下まで隠れてはいるが、きわどかった。

さあどうしようかと考えたところで、終夜に名案が浮ぶ。

「小学校以来湊以外で初めて友達ができたんだ。こういう時相談しないとな」

終夜は携帯を取り出して希の番号を表示させる。

初めて会った日の帰りにメアドを交換していたのだ。

もつとも終夜が積極的に申し出たのではなく、湊が気を遣ってくれたのだが。

女の子のことは女の子に聞いたほうがいいに決まっているとさっそく電話を鳴らした。

「（いやまで、なんて聞けばいいんだ？）」

鳴らし始めたところで極めて繊細だろう問題に気づく。

『はい小鳥遊ですが、不動さん？』

「（なんて言うべきか……………）」

『不動さん？』

着信の時の画面で終夜だと分かっているのだろうが、終夜の返事がないため自信なさげな声だ。
そもそもかかってきた電話に出て反応がなければ怖くなるのが普通だ。

そのことに気づいた終夜は慌てて口を開いた。

「あ、ああ、すまない。ちょっと相談があるんだけど……………」

『はい。私でよければ相談に乗りますよ？何でも言ってください』

「ええと……………」

朝也は必死に考えた。

しかし心配そうに聞く希に急かされるように、思っていたことをそのまま口に出してしまった。

「女性用の下着がほしいんだけど……………買いつらいんだよね」

『え、ええと……………』

「（アウトー！！）」

何でも言ってくださいと言ってくれたが、これは希が予想していた内容を遙かに超えていたことだろう。

希ができる範囲を超えている。

下手すれば希の下着をくれと言っているようなものだった。

だが希はどうオブラートに包んで言っべきか迷っているのか、言葉を探していた。

明らかに不審な終夜に対して、思ったことをそのまま言葉に出さないあたり、希の性格の良さがうかがえる。

「・・・すまない。事情をきちんとさせてくれる時間を与えてくれればうれしい」

自分があまりにも恐ろしいことを言ったことに気づいて冷静になる。今鏡で自分の顔を見たら絶対に真っ青だよな、と思うほど血の気が引いていた。

『は、はい』

別に隠すことではないので綾音のことを出会いから含めてすべて説明する。

次第に安心していく希の声を聞いて、終夜も心の底から安堵した。

『そういうことですか。安心しました』

本当に安心しているのだろう。

高校最初の友人が、女性用の下着を求める変態だというのは避けたところだ。

「（希が理解ある人でよかったあ）」

相談相手を望にしていたら大変だっただろうと、終夜は自分の判断を喜んだ。

『それなら私が適当に買ってきて不動さんの家に持っていけますよ。綾音ちゃんを連れて買い物はできないようですから』

「本当か！なんだか悪い気がするけど他に方法がないから頼んでいいかな？」

『遠慮しないでください。では簡単にサイズを今測ってもらえますか？』

また無茶難題を、と思ったが、自分で買うことを考えたら安いものだと思い改めた。

「・・・分かった。たぶんちょっと時間かかると思うからまたかけなおす」

「分かりました。急がなくても大丈夫ですから」

希の気遣いに、本当にいい友達を持ったと感動しながら電話を切る。未だにかわいい寝息を立てている綾音を見ながらこれからのことを考えて、終夜は先ほどの自分の決断を少し後悔した。

第二話 出会い（後書き）

前作を見ていただいていた方のみには報告です。名前を綾香から綾音に変更しました。理由は一人称が綾香より綾音のほうがしっくりきたからです。

第三話 綾音のサイズ

終夜の目の前には静かな寢息を立てている綾音の姿がある。

これからのことを考えながら、起こしたほうがいいのかどうか迷っていた。

だが、綾音はいわば無垢なる子ども。

これから終夜が綾音に対してすることを想像すると、間違った知識を与えかねなかった。

「しょうがない。こつそり・・・いやこれだとやましいことをするみたいだな。さっさと済ましてしまおう」

希に下着を含めた衣類を購入してもらうのに、サイズを測る必要があった。

終夜は女性が服を購入するとき、どの程度サイズを気にするのか分からない。

終夜自身は服もパンツも袖と裾の長さだけ合えばよかっただけだし、下着なんてS・M・Lぐらいしか考えたことがない。

希にわざわざ頼むのだから中途半端なことはしたくなかったため、希が買う時に困らないようにできる限りのことは調べるつもりだったのだが・・・

「まずは腕と足の長さだな」

本来なら試着して買うものなので、今回はこれぐらいはしないとならない。

終夜はメジャーとメモを手には寝ている綾音に近づいた。

「改めて近くで見ても、やっぱり小さいなあ」

冷静に綾音を観察するのは今が初めてだ。

最初から小さい子だとは分かっていたのだが、細くて華奢だった。

「よし。あ、靴も必要だから足のサイズだな」

足囲そくいと足長そくちようを測る。

終夜が足に触れたとき、綾音が少し身じろぎした。

起こしてしまったか、と一瞬不安になったが、むにやむにやしただけで眠り続けてくれた。

「そういえば赤ちゃんはほっぺに刺激がくると、その方向に口を近づけるといいうのを聞いたことがあるな」

綾音の寝ている姿が赤ちゃんの姿がかぶったため、終夜は興味本位に綾音の頬をつつついてみた。

「んっ」

綾音は少し身じろぎしただけ。

終夜はその反応がおもしろくて何度も続ける。

「んんっ・・・・・・・・・・あむっ」

数回では赤ちゃんのように口を近づけなかった綾音だったが、何回も続けているうちに、いきなり終夜の指を咥えてしまった。

歯ぐきはぐきが気に入ったのか、そのまま指を甘噛みする。

終夜は綾音の口の中の温かさに動揺しつつも、慌てて指を引き抜いた。

「赤ちゃんみたいだからこそ困りものだな」

様子が赤ん坊に似てても、実際見た目は終夜と年がそんなに離れていない。

「それより次が最後だな。これが難関なんだが」

いくら小さいとはいえ、綾音は正真正銘女の子だ。ロボットかもしれないけど女の子には違いない。

「どう見てもBはないな。AとA Aの違いがよく分からないから一応きちんと調べないとだめだよなあ」

女の子にブラは必須だ。

たとえばわずかでも膨らみがある以上、きちんとつけていないと将来型崩れ（型崩れするほど成長するかはともかく）する可能性があるし、そもそも乳首は胸の大きさに関係ない。

「確かアンダーとトップの差で決まるんだっけか」

終夜は昔、カップの決め方は揉み心地で決めるものだと思っていた。漫画等でブラを買いに来たお姉さんが、店員に胸を揉まれている（実際には寄せてたりしていて、決して変な意味ではないのだが）のを見て、実際に触ることが前提だと思っていた。

「昔の知識のままだったら大変なことになってたな」

終夜は起こさないように綾音の体を起こして自分の体にもたれさせる。

服の上からでもいいのだろうかと一瞬思ったが、これを脱がしたら

スッポンポンだったと思い出してそのまま測ることにした。

「ん、んっ」

先ほど頬を突つついたときよりも悩ましい声をあげる綾音。敏感な部分が擦れているのだからこの反応は仕方ない。

「端から見たら完全にアウトだな。それ以前に俺もアウトだ」

どのくらいきつく締めて測ればいいのかと四苦八苦しているとふと違和感が。

「・・・・・・・・」

綾音の目が開いていた。

目を開きながら寝ているのではないとしたら、起きているのだろう。その目は微妙に寝ぼけていたが、目覚めているのには変わらない。

「・・・・おはよう」

それは悩んだ末に終夜が選んだ言葉だった。

「ん、おはよう・・・・・・・・なにしてるの？」

至極もつともな疑問である。

「あ、綾音も女の子なんだなあ」

意味が分からなかった。

それに対して綾音の答えは。

「違う、綾音はロボット」

「そ、そうだったな」

どうやら綾音にとって、自分がロボットというのは重要らしい。そのまま微妙な空気の中、なんとか終夜は綾音のアンダーとトップを測り終えた。

綾音は微妙に寝ぼけていたのか、悩ましい声をあげるだけで、特に終夜に問いただすことはしなかった。

「…………ギリギリだな」

「なにが？」

「いや、なんでもない」

綾音の名誉のためにここは黙っておこうと終夜ははぐらかす。もつとも、この無垢な瞳の持ち主にその必要はなかったのかもしれない。

「ああ、よろしく。じゃあまた後で」

『はい』

なんとかかすべて測り終えた終夜は希に自分の成果を告げて電話を切った。

難関を突破できて一安心する。

「とりあえず掃除しよう」

頻繁に掃除をしているから汚れていないはずだが、女の子を家に呼ぶということで少し神経質になる終夜は、掃除機を取り出してスイッチを入れた。

ブオオオン

「それはなに？」

綾音は物珍しそうな顔で掃除機を指さす。

「これは掃除機って言って、床をきれいにするための道具だよ」

終夜は、綾音が本当に何も知らないんだということを改めて実感しながら説明する。

「やってみるか？」

「うん」

綾音に掃除機を渡すと、綾音はさっそくボタンを押した。だが、急に音がなって驚いたのか、掃除機を落としてしまう。

「・・・・・・・・」

落とした掃除機を見下ろしたまま、綾音は拾わない。

「どうした？」

「・・・重い」

終夜は綾音の体重がものすごく軽かったことを思い出しながら、わなわな震えている細腕を見て妙に納得してしまった。

「OK。無理は禁物だ」

綾音を隅に移動させて掃除を再開する。

一通り掃除をし終えた（窓ふき等も含めて）いいタイミングでチャイムが鳴る。

「はいはい」

扉を開けると私服姿の希と望が立っていた。片手には大きな買い物袋を持っている。

「ごめんなさい。望も行くってきかなくて」

「全然かまわないよ。さあ入って入って」

「おじゃまします」

「おじゃましまーす」

終夜は大きな買い物袋を希から受け取って、2人をリビングのある、二階に案内する。

希はカーディガンにロングスカートといったシンプルでおとなし目

の服装。

望は短いスカートにYシャツの上にカーディガンといった、ちょっとボーイッシュな感じた。ただし制服と同じで袖が少し長い。2人の雰囲気そのまま服装に現れていた。

「綾音ちゃんこんにちは」

小鳥遊姉妹を警戒して終夜の後ろに隠れている綾音に、希は少し膝を落として同じ目線で挨拶をする。

「・・・こんにちは」

「私は小鳥遊希と言います。よろしくね」

「ボクは望だよ。よろしくー」

「・・・よろしく」

終夜の後ろに隠れながらも顔を出して挨拶を完了させる。

「じゃあさっそくいろいろとお洋服を買ってきたから着替えましょう」

「さあ不動君は外に出た出た」

男の終夜がこの場にいるわけにはいかない。

終夜の家の二階には、階段を昇ってすぐのところにリビングが眼に入る。

そのため廊下がないので、近くの部屋に入る。

『下着もいくつか買ってきたから好きなのを穿いてね』

『あ、それボクとお揃いだよ』

『とりあえず今日はこのお洋服を着てください』

『お姉ちゃんったら初めて男の人の家に行くからって、自分の服選
びに時間がかかったよね』

『ちよつと望』

『ホントのことですよ』

『あ、あれは今日の気温が微妙だったからどのくらい着込むべきか
悩んでいただけです』

「………なんか悪い気がしてきた」

男が同じ部屋にいないというだけでなんという乙女ワールド。
聞き耳を立てていたつもりではないけど、同じ部屋にいないという
のに終夜は居たたまれない気分だった。

この場からもう少し離れるべきかと悩んでいたところに、目の前の
扉がカチャリと音を立てて開いた。

「……終夜………」

綾音が顔だけを出して終夜を呼ぶ。
入ってもいいという意味なのだろう。

「やっと終わったか」

「・・・・・・・・・・？」

「なんでもないよ」

終夜は部屋に入って改めて綾音を見る。

綾音袖にフリルがついたピンクのかわいらしいワンピースを着ていた。

「パジャマとかもついでに買ってきました」

やけに大きな紙袋だなと思っていたら生活に必要な服を一通り買ってきてくれたみたいだった。

「それより綾音ちゃんの恰好見て不動君は何か感想ないの？」

「ん？ああ、希はセンスあるな」

「あ、ありがとうございます」

「・・・・・・・・そっち？」

望は何か言いたそうにして諦める。

終夜は希にお金を渡して再度お礼を言った。

「気にしないでください。そろそろ私たちはお暇しますね」

「ろくにお礼もできなくてごめんね」

「もう、そういうことは言わないの。こういふのはお互い様でしょ」

「（なんていい子なんだ）」

終夜は心の中で激しく感動しながら玄関まで二人を見送る。

「今日はいろいろとありがとう」

「……………ありがとう」

「じゃあまた明日ね、不動君、綾音ちゃん」

「ばいばーい」

「ああ、また明日」

お邪魔しました、と2人は不動家を後にした。

「……………ふう」

下着を含めた服という難関を突破したとはいえ、まだまだ問題は山積みだ。

さあこれから綾音をどうしようかと頭を悩ませる終夜だった。

第四話 新しいクラス

「俺は今から学校に行ってくるからきちんと留守番をしていてくれよ」

終夜が綾音と出会った翌日。

終夜は学園に行く前に綾音にきつく念を押しておく。

「学校？」

どうやら綾音は学校も知らないらしい。

昨日からいろいろと話していて分かったことだが、綾音には常識的な知識が欠けている。

さらには箸の持ち方も知らないほど生活知識もなかった。

それなのにロボットという存在を知っているのが不思議だったのだが、本人もよく分からないらしい。

「とにかくお昼はラップしてあるから電子レンジでチンして食べてくれ」

「電子レンジ・・・？」

「昨日教えただろ」

終夜は昨日のうちに家で留守番をするのに必要な知識を教えていた。その中に電子レンジの使い方を教えていたのだが・・・

「あ・・・あれ？」

綾音が思い出したというふうに指を指す。
指を指さした先にあったのはトースターだった。

「……………もう一度最初から説明するよ」

「ギリギリセーフ」

終夜はチャイムが鳴り終わると同時に教室に滑り込む。
今日は先日の実技の結果でクラス分けが行われていた。
入学式の時は仮であって、本決まりではなかった。
掲示板から自分の名前を探していたら、ギリギリになってしまった
のだ。

しかし、遅くなった一番の原因は他にあった。

「まさか電子レンジからあそこまで苦勞するとは思わなかった」

不動産の電子レンジの使い方は、温めたいものを入れて「温め
スタート」というボタンを押すだけで済むものだ。
もちろんものによって設定が変更できるため他にもボタンやダイヤ
ルはあるのだが、たいていはこのボタン一つで済む。
しかし、綾音はそれが気に入らなかったらしい。

「もっとボタンを押したい」

こんなことを言い出した。

「電子レンジを触ったこともないやつが変な欲を言うんじゃない」

「でも………」

「でもない。とにかく俺はそろそろ行かないと遅刻する。言った通りにやってくれよ」

さあ急ごうと玄関に向かうと、なにやらボタン音が連続で鳴り響いた。

「設定を全部キツイやつにするんじゃない！」

温めの強さが「自動」から「瞬」へ。

温め時間が「自動」から「長」へ変更されていた。

「瞬」はその名の通り一瞬で温めることができる。

創造を利用した画期的なアイデアということで一時期人気が出た電子レンジなのだが、食材によっては燃えてしまい、加減ができないので今では使われていない。

「野菜炒めを燃やす気か!？」

「人参とピーマンは燃えたほうがいい」

「キャベツも燃えんだよ！」

そこから人参とピーマンは食べたくないということで争っていた。昨日は買い物に行けなかったから野菜炒めしか作れなかったのだ。夜はカップ麺で過ごしたが、綾音にお湯を温めるなんてことができないわけではない。

「はあ〜」

朝の出来事を思い出してまた心配になる。
帰宅したら火事になってたなんて洒落にならない。

「おはよう不動君」

「おはようございます」

やっぱり今日は家に帰ろうかと、変に気が変わりかけている中に小鳥遊姉妹が話しかけてきた。
どうやら同じクラスになったようだ。

「ああ、おはよう」

学校で女の子に朝の挨拶をするなんて何年ぶりだろうかと終夜は少し感動する。

「綾音ちゃんのこと？」

終夜が遅くなった理由を察して声をひそめて希が聞いてくる。

「まあね」

朝の出来事を説明すると、何と言ったらいいか分からないといった表情になる。

「た、たいへんね」

「家が火事になる大変だけは勘弁願いたいものだな。それより先生はまだなの？」

もうそろそろ来てもいい頃なのだが、まだ来ている様子はない。

「案外道に迷ってたりしてな」

とりあえず席につこうかと思ったところに、知らない男が急に声をかけてきた。

「おっと、いきなりすまん。俺は柊大河だ。ひいらぎたいがよろしく」

中学以来友達というのができなかった終夜は、入学仕立ての人はどうやって友達を作るのだろうと疑問に思っていたのだが、こういうやつから輪を広げていくんだなと妙に納得して自己紹介をしようとする。

「俺は……」

「お前のことは知ってるよ。不動終夜だろ？有名だからな」

その言葉でこいつも馬鹿にしてきたのかと終夜は少し警戒する。

「ああ違う違う。俺はお前をバカにしたりなんかしねえよ。俺もあまり人のこと言えないからな。それに創造ができないことで有名ってことで知っているのは事実だが、俺が興味持ったのはもっと別のことだ」

「別のこと？」

「ああ。お前は入学してからたった二日でこのクラスの美人姉妹と仲良くなった男子生徒だからな」

確かに小鳥遊姉妹はこのクラスの中で一際目立つ。

実は周りの男子がどうにかしてこの2人にお近づきになりたいとあれこれ思案していたところに、終夜がすんなりと話していたものだから、創造ができないのとは違う意味で密かに目立っていた。

ただ、きっかけが終夜の創造ができないといことだったために、さらに反感を買うことになっていたのだが・・・

「ボクたち美人姉妹だって。なんだか照れちゃうな」

「ちょっと恥ずかしいです」

望はどちらかというと美人というより可愛い部類に入るだろう。だがどちらも容姿が整っていて、入学したばかりの男子には話づらいものではあった。

「お二人ともよろしく。それで、興味深いことを話していた気がするんだが・・・」

図々しい性格だなと終夜は大河を評価する。

悪いやつではないだろうけど、興味本位でいろいろと首を突っ込んでそうだとあまりいい感情は持てなかった。

内容が内容だからどうはぐらかそうかと思案したところで教室の扉が開いた。

「ごめん。ここに来る途中で道に迷っちゃって」

終夜にはこの教師の言っている意味が分からなかった。

おそらく終夜以外のこのクラスの生徒全員、意味が分からなかったことだろう。

まさか何気なく言った大河の言葉が当たりだとは思ってもいなかった

た。

そもそも教師が学校内で道に迷う？教師でなくても迷わないだろう。

「皆さん初めまして。私は今日からこのクラスの担任になる水城瑞希です。ちなみに私は創造が全然できませんーん」

すごい高いテンションですごくダメなことを言う水城先生。

この学園はこのクラスに創造を学ばせることを諦めたのだろうか。

入学式の時は風邪で寝込んでいたらしい。

どこまでもダメな教師だと皆が感想をもつのは仕方がないことだと終夜は思う。

「じゃあホームルームを始めますね」

それから水城先生は何度も躓きながらホームルームを進行させる。本当なら10分とかからずに終わるものを30分もかけて終わらせた。

そのせいか、次の授業の先生の額に青筋が浮かんでいた。

「やっとう昼食タイムだー」

4限目の終了を告げる鐘が鳴ると同時に大河が昼食の時間をわざわざ大声で告げる。まだ先生は授業終了の合図をしていない。

「中学生気分が抜けてないやつがいるみたいだが、勉強はきちんとしとけよ」

4限目担当の先生は嫌味を含めた言い方をして退出していく。当然

そんなことに気にした素振りを見せない大河は自前の弁当を鞆から取り出した。

「お前、弁当あるんだな」

大河はたいしたことじゃないと返事をする。

「姉貴が作ってくれるんだよ。自分のを作るついでにつてね」

そう言つて大河は弁当に勢いよくがつつき始めた。
他の人はまだ弁当を出してすらない。

「終夜、飯食べようぜ」

少し終夜とは離れた位置にいた湊が終夜を昼食に誘う。

大河のことには気づいていないようだ。

だが大河は違ったようで、湊に気づくのがつついていた弁当を一旦机に置く。

「お、有名人二号」

どうやら湊のことも知っていたようだ。

「（そういえば湊も一緒にいたからな。でも・・・）」

「終夜どうする？」

大河の声が聞こえなかったのか、湊が再度終夜に問う。

「月城湊だろ？」

「終夜は弁当持ってきたか？」

湊は無視を決め込んだようだ。

「（湊は大河みたいなタイプが嫌いだからなあ）」

以前に湊が言っていた。

俺の嫌いな人間はとにかく図々しいやつだ、と。

大河はそれ以外にも見事に湊が嫌うタイプだったのだ。

「無視かよー」

「月城君、無視しちゃだめだよー」

事情を分かっている望が注意をする。

「そうだそうだ」

だが、大河は調子に乗ってしまった。

それでも望が湊を見つめるので最終的に湊は観念せざるを得なかった。

「なんだ？」

若干声が震えている。

「お、やっと気づいたか」

これは素で言っているのだろうかと終夜は心配になる。

湊は怒鳴り散らすことをしないタイプだが、それでもこの後どうなるか不安だった。

「・・・・・・・・・・」

「ま、特に話すことはないんだけどな。お前も一緒に飯食おうぜ」

何かが切れる音がしたのは言うまでもないだろう。

それに気づかなかったのは大河だけだ。

その大河がふと思い出したように聞いてきた。

「そっいえばさっきの綾音ちゃんがどうのって話についてけど・・」

「なんのことだ？」

終夜は湊には放課後にでも言うつもりだったのだが大河に言うかどうかは悩んでいた。

しかしこの空気をなんとかするにはちょうどいいかもしれないというのと、どうせ今はぐらかしてもしつこく聞いてくるだろうということでは仕方なく話すことにする。

「・・・・・・・・それはまた難しい問題だな」

やはり湊は真剣に事の難しさを感じて親身に考えてくれている。

「でもそれって見ようによっては軽く犯罪じゃね？」

やっと戻りつつあった穏やかな空気を大河が再びぶち壊す。

「状況を考えるに終夜の選択は正しい。そのまま放っておくほうがどうかしていると思うぞ」

「まあそうだけどさ。普通に犯罪だろ。しかも今は一つ屋根の下で2人暮らしたろ？どこのエロゲーだよって感じだよな」

「お前はもう少し言葉を選べ。無神経すぎるぞ。表面の状況だけで判断するな」

湊の言う通りではあったのだが、大河と同じことを一瞬考えた終夜は黙っているしかなかった。

「と、とにかく放課後皆で不動君のお家に行こ、ね？」

場の空気をなんとかしたいと思っての発言だった。

しかし皆で、ということは大河も含まれている。

それに気づいた湊は当然反論しそうになったが、望の考えに気づいて渋々了承した。

「ん？希少し顔が赤くない？」

終夜が希の異変に気づく。

実は先ほどの大河のエロゲー発言に反応して赤くなったのだが、終夜は気づかない。

「な、なんでもないです」

「体調悪いなら保健室で休んでた方がいいぞ。俺の家に来るのも今日じゃなくていいし」

「なんでもないんですっ」

「そ、そうか」

希の勢いに終夜はたじろぐ。

それでも納得のいかない終夜は、心配で希の顔を覗き込んだが、希は顔を隠してしまった。

「終夜」

「なんだ？」

湊が終夜の肩に手を置いて静かに首を振る。

その顔はどこか呆れていた。

「いらつしゃい」

終夜が家に友達を招き入れたのは、湊を除いたら前回の小鳥遊姉妹が初めてだった。

終夜自身、高校に入学してから数日で大勢招き入れることができるなんて思ってもいなかった。

「けっこう広いんだな」

大河の言う通り、終夜の家は6人が入ってもまだ全然余裕がある。

玄関から入ると、目の前に螺旋の階段が見える。

一階にはトイレ、浴室、洗面所の他に三つの洋室があり、階段を昇ると右にダイニングとキッチン、左にリビングがある。

奥には二つの洋室がある。

「いや、これは広すぎだろ」

「希と望も昨日来たとき、かなり驚いたんじゃないか？」

「え、ええ」

「う、うん」

中学の頃に経験した湊が何気なく聞いたのだが、本人たちはなぜか歯切れの悪い返事をする。

「部屋は余ってるからいつでも泊まりに来ていいよ」

このセリフを言える時がくるとは思わなかった、と内心感動して綾音がいるだろう二階のリビングに案内をする。

「あ、しゅうや」

リビングでテレビを見ていた綾音は終夜に気づくと、とてとてと終夜のもとへ歩いてきた。

終夜は寄ってきた綾音の頭を撫でて、ただいまと言うと、即座に電子レンジを確認した。

「（よし、なんともないな）」

綾音の物覚えはよかった。

ただ天然の部分が物覚えの良さを悪くしていただけだったようだ。

「へえ、けっこうかわいいな」

小鳥遊姉妹の時と同じく、人見知りな綾音は終夜の後ろに隠れる。

「こんにちわ」

希が最初の時と同じように視線を綾音に合わせて挨拶をした。

「・・・・・・こんにちわ」

続いて望、湊、大河の順に一通り挨拶をして、綾音は警戒をほんの少しだけ解いた。基本は挨拶から。綾音も挨拶を普通にかわせる相手にはある程度心を許せるようだ。

今日は綾音を紹介することが目的だったので、他愛もない会話を始める。

内容は自然と学校の話になった。

「そういえば知ってるか？鷹左右学園のクラス分けは実力順になっているんだ。Aクラスはもちろんのこと、俺たちEクラスは一番下ってことだな」

「それは知っている。だからなんだ？」

湊は大河に対して微妙に喧嘩腰だ。

しかし、大河の言う鷹左右学園のシステムは、学園の生徒なら誰もが知っていることだった。

「いや本題はここから。どうやら俺らEクラスは問題児扱いされているらしい」

「問題児？ボクたちはまだ問題なんて起こしてないよ」

「いや、この場合の問題児というのは創造のことだろ？」

「その通りだ終夜。創造に関して欠陥がある生徒を集めたクラスがEクラスらしいぞ」

この場合の欠陥とは、単に創造が苦手ということではない。

終夜のように媒体が定まっていなかったり、希と望のようにお互いが媒体で精神的に不安定な人たちのことを指している。

そして、終夜は大河の情報で疑問が一つ解消された。

なぜEクラスは人数が他のクラスと比べて極端に差が出てしまっているのかということだ。

Aクラスを除く他のクラスは平均30人ほど。

Eクラスだけ、わずか10人ほどしかいなかった理由だった。だがここでまた新たな疑問が浮上する。

名門とも言われている鷹左右学園に、なぜ欠陥を抱えた生徒が10人もいるのかということだ。

「その情報はどこからきたんだ？」

「俺、情報通なんだよ」

納得できる回答ではない。

というか質問に対する答えにはなっていなかった。

「そういえば、柊君の媒体ってなんなの？」

この場で媒体が何か分かっていないのは大河だけだ。

希は望で望は希。終夜はとりあえずペンダントで、湊は指揮棒だ。この四人はたまたま試験の時お互い見ていたから知っていたのだが、大河だけは試験の時を見ていなかった。そのため望の疑問はもつともだったが、普通は媒体のことを人に問うことはしない。

自分の媒体を晒すということは、自分の弱点を晒すのと同義だからだ。

「ん？ああ、俺はこれだよ」

大河は特に気にした様子も見せずにポケットから何かを取り出す。ポケットから出したのはビー玉だった。誰が見ても普通のビー玉だった。

「ビー玉・・・だね？それが一番大切なもの？」

「ほら、子供の時ってなんでもものを集めたがるものだろ。子供の時に姉貴が唯一くれたビー玉が印象強くてな。それからビー玉ばかり集めてたんだよ。ま、それが今も続いてるってことだな。別に今もビー玉大好きってわけじゃないんだけど、なんかこれがしっくりくるんだよ」

「・・・・・・・・」

「皆黙りこくってどうした？」

重度のシスコンだと公言したことに、自覚はないようだ。

大河にとってはビー玉そのものより、姉がくれたという事実がうれしかったのだろう。

子供でそうなるのは分からなくもないが、それが今もなお引きずっ

ているというのは普通はない。

よほど姉が好きでなければ媒体に選ばれるまでにはならないということだ。

「でもそれって不確定媒体だよな？」

「お、よく気づいたな」

不確定媒体……今回のビー玉のようにビー玉ならなんでもいいということだ。例えば湊が愛用している指揮棒は世界中に一個しかない。たとえ名称が同じ指揮棒が存在しても湊とともに歩んだ記憶までは同じではない。

しかし大河の場合、ビー玉ならその辺で売っているものでも何でもいいということだ。

これは一見有利に思えるが、実はそうでもない。

不確定媒体の時は決まって他にもっとしつくりくる媒体があるものだ。

不確定媒体だと50%しか本領を発揮できないと言われている。

なぜこのようなことが起きるのか原因は不明だが、脳が様々な理由で一番大切なものをごまかしているのではないかとされている。

「ま、それ以前に俺は得意な属性が分からないからな。不確定だろうが確定だろうがたいして関係ないよ」

得意な属性が不明というのは珍しいケースだが、50%しか実力が発揮できないのならしつくりくる属性が見つからなくても不思議ではない。

「しゅっや」

急に今まで話に入っていなかった、綾音が終夜の名を呼びながら服を引っ張った。

綾音は終夜に意思を伝えたいとき、いつも終夜の服を引っ張って注目させる。

「あ、ごめん。今日は綾音を紹介するために呼んだのにな。学校の話ばかりしててごめんな」

皆も、綾音に関係のない話ばかりしていたことに反省して綾音を見る。

しかし、当の本人は気にした様子を見せずに、一言告げた。

「……………お腹空いた」

その時、間抜けにも綾音の腹の音がリビングに鳴り響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6951y/>

想像が創造を具現化させる

2011年11月24日11時49分発行